

高校野球の練習は週に何日？

球春間近となった。プロ野球だけでなく、「センバツ」の開幕を楽しみにしている人も多いことだろう。高校野球といえば、ひと昔前までは毎日が練習日。厳しいトレーニングに耐えた者だけがレギュラーになれる——そんな雰囲気があった。

最近では強豪校でも週に1度は休みをとるところが増えてきた。が、それでも高校生にはハード過ぎるとして警鐘を鳴らす人がいる。

「頑張り過ぎなくていいんです、日本の球児は。何百球の投げ込みとか何千本の素振りとか、そんなのを頑張っちゃダメなんです」

こう述べるのは、今年メジャーリーグで7年目のシーズンをむかえるダルビッシュ有選手。彼は日本の高校野球に根強く残る“ガンバリズム”の体質を真っ向から批判する。正しい知識をもたない監督やコーチが、自分の成功体験だけに基づいて球児に猛練習を強いるから、壊れてしまう選手が後を絶たないのだと。

もし自分が監督を務めるなら、週休2日制にして全体練習は1日3時間にとどめる。それで十分だし、むしろそのくらいのほうが成長するのだとダルビッシュ投手は言い切る(朝日新聞1月6日付け朝刊)。

さらに「エースが150球の熱投！」などと美談めいた報じ方をするマスコミにも問題があるとして、1年生投手なら5回、2年生は6回、3年生は7回までと投球イニングに制限を設け、その代わりベンチ入りできる人数を増やすことを提案している。

野球愛好者の間でも賛否が分かれる意見だろうが、旧風にとらわれない考え方は、高校球界に限らず参考にしたいところだ。

人事コンサルタント 本田 有明

トイレ掃除を命じられた人

「おまえがトイレを掃除しろ」と、大学野球部の主将が監督から命じられた。

「なぜ自分がですか？」と彼は反論した。

ふつう掃除は下級生の仕事だ。上級生の彼は、主将であると同時にチームのエースだった。それが汚れ仕事をさせられるのは理不尽ではないか。

監督はこう答えた。「おまえが主将だからだ」。なおのこと納得できない。

すると監督は自分でトイレへ行き、ワイシャツの袖をまくって便器に手をかけた。

主将はびっくりして、すぐに監督の手を制した。まさか監督にトイレの掃除をさせるわけにはいかない。

こうして彼は、リーダーだからこそイヤな仕事を引き受けなければならないことを学んだ。リーダーが率先垂範してこそ、メンバーもそれに倣うということ。

掃除を命じられたのは明治大学野球部時代の星野仙一氏。監督は当時、東京六大学のドンと称された島岡吉郎氏である。

のちに星野氏は、プロ野球の監督時代にこう語った。「ぼくは遠征先でも、身のまわりの片づけや洗濯は自分でやっていますよ。学生時代に鍛えられましたから」

イヤな仕事というものは、掃除に限らず、数多くある。そのやり方を人に教える者は誰か。少なくとも、自分が実践したことのある者でなければ教えられない。人に教えることのできる者がリーダーであり、誰よりも率先垂範を厭わぬ者にその資格はある。

年明け早々に星野氏逝去の報道に接したとき、最初に思い浮かんだのはこんなエピソードだった。合掌。